

# 喜連川の謀将

簑輪 諒



油蟬あぶらぜみが暑苦しく、競うように鳴いている。陽炎が立ちそうなほどの盛夏の熱気は、午後を過ぎても一向に衰える気配がない。強い日差しに目を細めつつ、三十代半ばと思しき、片肌脱ぎの壮年の男は、矢をつがえた弓を構えた。十五間（約二十七メートル）ほど先の的を睨みつつ、きりきりと引き絞る。喜連川きつれがわ城中の弓場ゆばに、張り詰めた静寂が流れた。

やがて手の中で弓弦が鳴り、矢は鋭く飛んだ。しかし的を射抜くことはなく、あづち的山に空しく突き刺さった。男は髭ひげの濃い顔を忌々しげに歪め、再び矢をつがえる。その後、次々と二の矢、三の矢と放ったが、やはり的あには中たらない。

男は苛立ちを隠そうともせず、

「新三郎っ！」

と、傍らに控える若者——小姓の彦間ひこま新三郎しんざぶろうを怒鳴りつけた。

「は、私になにか……」

「なにかも糞もあるか」戸惑う新三郎を、男は睨み据え、「お主、いま腹の底で、わしのことを嘲あざけっておったであろう。そういう目をしていただぞ」

「あ、安房守あわのかみ様、滅相もございませぬ！ そのようなこと、私は露ほども……」

「ええい、黙れ！ 主に口答えするでないわ！」

男——塩谷安房守しおのや惟久これひさ（義上よしひさ）は、ひれ伏して恐れ入る新三郎に、弓を投げつけた。さらには、別の小姓に預けていた杖をひったくり、背中や頭を何度も殴りつけた。うずくまって鈍い痛みには耐えながら、新三郎は助けを求めるように、周囲の塩谷家臣たちを見やった。しかし、彼らは気の毒がってはいるようだったが、身を挺してこの主君を止めようとする者は一人もおらず、ただ呆然と、理不尽な「折檻」を傍観するばかりだった。

やがて、惟久は杖を放り出し、「これだから余所者よそものは」と吐き捨てるようにいった。

（……ならば、俺のことなど、召し抱えねば良かったではないか！）

危うく口から飛び出しそうになったその言葉を、新三郎は辛うじて飲み下し、ふらつきながら居住まいを正すと、地面に額をこすりつけて惟久に詫びた。

「申し訳ございませぬ。なにとぞ、ご容赦のほどを……」

「ふん」

惟久は片肌に袖を通し、肩を怒らせつつ去っていった。その足音が遠ざかってから、新三郎は小さく嘆息した。身体きしのあちこちが、軋むように痛む。

（なぜ、こんなところに来てしまったのか）

言葉に出す代わりに、地面に唾を吐いた。口の中が切れていたのか、わずかに血が混じっていた。

ときに、天正十七年（一五八九）、七月。時代は、戦国と呼ばれる乱世の最中であつた。

<sup>しもつけのくに</sup>下野国<sup>うつのみや</sup>の宇都宮氏<sup>ふじわらのみちかね</sup>といえば、平安以来四百年の歴史を誇る、北関東の武家の名門だ。関白・藤原道兼の曾孫、宗円<sup>そうえん</sup>を家祖とする同氏は、宇都宮城を本拠に、野州<sup>やしゅう</sup>（下野国の略称）中央部の広範な版図を支配し、最盛期には関東屈指の有力大名として君臨した。

同国の塩谷郡を領する塩谷氏は、その宇都宮氏の一門であり、北方の守りを代々任されてきた重臣であつた。もっとも、新三郎の主君、喜連川城主・塩谷惟久は同氏の分家に過ぎず、同じ宇都宮家臣ながら、塩谷氏総領（惣領）の意を仰ぐ立場にあつた。宇都宮家中や近隣の住民からは、総領家と区別する意味で、居城にちなんで「喜連川殿」などと呼ばれることが多い。

「そんな些細なことですら、あのお方は気に食わないのだろうか」

井戸の前でもろ肌を脱ぎ、肩や腕の傷をすすぎながら、新三郎は独りごちた。

惟久は、塩谷氏の総領である、塩谷義綱<sup>よしつな</sup>とひどく仲が悪い。その因縁は、彼らの父親同士の争いに由来する。

そもそも、喜連川の惟久と、総領家の義綱は従兄弟<sup>いとこ</sup>であり、すなわち、彼らの父親は兄弟であつた。喜連川の先代当主・弥七郎は、弟であつたため分家を継いだが、彼はひそかに野心を抱き、二十五年前――永禄七年（一五六四年）、総領である兄・弥六郎に対して謀叛<sup>むほん</sup>を起こす。喜連川勢は、夜の闇に紛れて総領家の居城（川崎城）を急襲し、弥六郎およびその妻子らを討ち果たした。かくして、喜連川の弥七郎は、望み通り塩谷氏総領の座についた。ところが、あの夜襲の混乱の中、弥六郎の幼き遺児が一人だけ、重臣の助けによって窮地を脱し、ひそかに山中へ落ち延びていた。

数年後、その遺児――塩谷義綱は、主家である宇都宮氏の仲介によって、本拠・川崎城に帰還を果たし、総領家の家督を継承した。一度は家督を奪った弥七郎も、宇都宮氏の命によって義綱と和睦し、元の喜連川城主に収まった。

やがて、弥七郎が病没すると、その子・惟久が喜連川城主を継ぎ、いまに至っている。惟久にしてみれば、口にこそ出さないものの、

――義綱さえ生きておらねば、わしこそが塩谷の総領であつた。

という肚なのだろう。義綱の名を聞いただけで、露骨に機嫌を悪くし、小姓や侍女に当たり散らすことも珍しくなかった。もっとも、義綱の方も似たようなもので――彼にしてみれば、父の仇の子である惟久を、忌み嫌うのも無理はなかったが――評定などで両者が顔を合わせると、その陰悪な空気に、家臣たちは生きた心地もしなかった。

(とはいえ、俺がこうして仕官にありつけたのも、両家の仲の悪さゆえと言えなくはないが……)

新三郎は、元は下野南西部の小大名・佐野家の家臣であった。故あって牢人し、各地をさ迷ったが仕官先は見つからず、ようやく辿り着いたのが、この喜連川城であった。

今から半年前、新三郎は、塩谷義綱の家中に遠縁の者がいると聞きつけ、仕官の仲介を頼み、なんとか義綱との拝謁までにはこぎつけた。しかし、文官の子で、武芸が苦手な新三郎を、義綱は気に入らず、けんもほろろに断られた。

途方に暮れた新三郎は、辿って来た道を逆に戻り、義綱の居城・川崎城から南東に三里半(約十四キロ)ほど離れた、喜連川の城下で宿を取った。

喜連川城は、小高い丘陵上の城郭であり、関東と奥州を繋ぐ街道、奥<sup>おく</sup>大<sup>だい</sup>道<sup>どう</sup>を見下ろす位置にある。このため、麓<sup>ふもと</sup>の城下町は宿場町も兼ねており、人の行き来も多く、なかなかのにぎわいであった。

ところが、その晩、喜連川城主・塩谷惟久の命によって、塩谷家中の者たちがいきなり、こちらが泊まる宿所に押し寄せ、新三郎は半ば強制的に、わけもわからぬまま城中に召し出された。そうして対面した惟久は、いかにも鷹揚な態度で、

——お主か、総領殿に仕官を願い出て、断られたというのは。わざわざ頼って来た者を見捨てるなど、塩谷一門の名にかかわる。もし望むなら、わしが召し抱えてやっても良いが、どうじゃな。

と言ってみせた。あのときは、地獄で仏を見たような気がしたものだ。

だが、その言葉が惟久の懐の深さなどによるものではなく、単に義綱への当てつけに過ぎなかったのだと知るには、さして月日はかからなかった。もともと狭量な惟久は、当初こそ新三郎に対して客分のように丁重な態度を見せていたが、次第に、

——お主の言葉使いは聞き苦しい。佐野の者は上野訛<sup>こうずけなま</sup>りが半端に混ざっていて耳障りじゃ。

——多少、文字や古典を人より知っているからといって、驕<sup>おご</sup>っておるのではないか。文官上がりはどいつもこいつも、すぐにそうやって賢<sup>さか</sup>しらな顔をしよる。

などと、ねちねちと言いがかりをつけるようになり、ついには先ほどのように手を上げるまでになった。もともと、新三郎のような他郷の人間が好きではないのだろう。しかし、義綱への見栄のために、召し放つわけにもいかないことが、ますます惟久を苛立たせているらしかった。

(我ながら、よく耐えているものだ)

水桶に映った、傷や青あざだらけの己の身体を眺めつつ、新三郎は苦笑するほかなかった。いっそ、喜連川を去ろうと、何度考えたことだろう。

「……去ったところで、どこに行けばいいのだろうか」

呟いてから、はっと我に返る。思わず口に出た言葉をかき消すように、新三郎は汲み上げた水を頭からかぶった。わずかに浮かんだ涙は、冷たい清水とともに流れ落ちていった。

それから、数日が経った。

その日の喜連川城中は、どこか落ち着かない空気に包まれていた。家中の侍たちは、胃でも悪くしたように憂鬱な面持ちの者が多く、小者や女中なども不安げに、ひそひそと何事かを囁き合っている。

「あの『化け狐』が、帰って来ているらしい」

偶然、朋輩の小姓たちが、詰所でそのようなことを話しているのを耳にした。

「なんだ、その化け狐というのは」

「ん？ あ、いや……」

尋ねられた朋輩は、気まずそうに言葉を濁したが、新三郎がさらに問いただすと、渋々といった様子で語り始めた。

「わしがそう呼んでいたと言うなよ。……新参のお主は知るまいが、喜連川にはかつて、そういうあだ名のご家老がおったのよ」

その男の名は、岡本正親というらしい。喜連川塩谷氏の譜代の老臣で、齢は六十を過ぎているという。

——（正親は）驕りを本として、民の嘆きをも顧みず、家中の患いる所をも弁えず（『那須記』）

などと評されるように、驕慢で欲深く、民や朋輩のことなど気にも留めない酷薄な男で、当然ながら、家中や領内ではひどく忌み嫌われていた。しかし一方で、その才は卓越しており、兵書や古典に通じ、戦の指揮にも長け、とりわけ策謀の巧みさにかけては、余人の及ばぬところであり、「智謀の玄妙なること、妖の如し」などと言われた。

家中の重臣たちは正親を憎みながらも、一方では恐れ、その能力を頼みとするほかなかった。あの横柄な惟久でさえ、この老臣相手にはどこか遠慮がちに接するところがあったという。

——あやつは、喜連川の化け狐よ。

狐は、老いれば妖力を得て、人を化かすようになるという。畏怖と侮蔑、両方の意味を込めて、正親が陰でそう呼ばれるようになったのも、無理はなかった。

「それほど権勢があったのに、岡本殿はどうして、喜連川を離れたのだ」

「離れたのではない。……追われたのよ」

小姓が言うには、二年前、正親がひそかに喜連川城の宝物蔵を物色し、累代の武具や貴重な書画などを売り払って、金銭に変えていたことが発覚した。これは、己の私腹を肥

やそうとの企みに相違なしと、家中では凄まじい反発が起こり、正親に腹を切らせるべきだという声も上がったが、主君の惟久がなんとか彼らをなだめ、一命だけは許された。

しかしながら、さすがの正親も、従来の地位に留まることはできず、家老の座から退き、「余生は俗世より離れ、高野山で仏道に帰依したく存ずる」などと言って喜連川を去ったが、実質的には追放であることは、誰の目にも明らかだった。

その正親が、帰って来た。高野山を下って還俗した彼は、すでにこの城中の別室で待たされており、これから惟久に拝謁するらしい。だとすれば、新三郎ら当直の小姓たちも、その場に付き従うことになるだろう。

「いったい、なんのために帰ってきたのだろう」

「わしが知るかよ。とにかく、くれぐれも、目をつけられるような真似をしないことだ。化け狐に祟<sup>たた</sup>られても知らんぞ」

小姓は冗談めかしくそう言ったが、声<sup>かす</sup>が微かに震えていた。

数刻後、正親は城中の広間に通された。惟久の傍らに控えていた新三郎は、その姿を初めて目にした。

痩せこけた、白髪白髭の老人。面長な輪郭や、切れ長の目つきは、なるほど狐を思わせる。しかし、それ以上に目を引くのは、齢に似合わぬ派手な紅地の胴服で、背中にはよりにもよって、老いた白狐が大きくあしらわれていた。

「趣味の悪い衣じゃな」

惟久は苦々しげにこぼした。

「己が陰でなんと呼ばれているか、知らぬわけではなかろうに」

「だからこそ、でございますよ」正親はにやにやと、粘りつくような笑みを浮かべ、「これを着て辺りを歩けば、喜連川の化け狐が帰って来たと、領内の隅々まで報せが駆け巡りましょう。いちいち伝えて回る手間が省けまする」

「相変わらず、小細工の多い男よ」

「ええ、それだけが、讃岐守<sup>さぬきのかみ</sup>（正親）めの取り得にございますゆえ。……それに、それがしは、もともと狐が好きなのですよ。狐死すれば正に丘首<sup>きつね</sup>す、と唐土<sup>まさ</sup>（中国）の故事にもあることですしな」

「……『礼記<sup>らいき</sup>』」

誰にも聞こえないほどの声で、無意識に、新三郎は呟いていた。が、正親は聞き逃さなかったらしく、

「おお、ご存知か！」

と、声を弾ませ、こちらを覗き込んできた。

「さすがは我が殿、見どころのある若者を召し抱えておられる」

「うん？ まあ、な……」

いつものこの主君なら、「また賢しら顔をして、わしを虚仮こけにするか！」などと新三郎に当たり散らしそうなものだが、褒められて氣勢を削がれたらしい。顔を渋らせる惟久を尻目に、正親は嬉しそうに続ける。

「さあ、説明されるがよろしい、若侍殿」

「は……」

恐る恐る、新三郎は口を開く。

「つまり、狐は、死ぬときは必ず、己の生まれ育った丘の方に頭を向けて死ぬという意味の言葉です。故郷への恩愛を忘れぬ、義理堅い獣である、と」

「なるほどな」

大して興味もなさそうにうなずき、惟久は正親の方へ向き直った。

「……回りくどいのは好かぬ。本題に入れ、正親。なんのために、お主の帰参を認めてやったと思っている」

「はっ」

正親も容儀を正し、次のように告げた。

「かねてよりお伝えしていた通り、上方におわす関白殿下——豊臣秀吉公とよとみひでよしが、じきに、東国の平定を行われます。すでに、かの北条家も、豊臣への臣従に向けて、交渉を進めております」

現在、関東最大の大名は、相模小田原城さがみを本拠とする北条氏（後北条氏）である。

同氏は、宇都宮氏のような伝統的な東国大名とは違う、戦乱の中で台頭した新興勢力である。家祖・伊勢宗瑞いせそうずい——後世、北条早雲の俗称で知られる——は、もとは京の室町幕府の高級官僚であったが、風雲に乗じて関東で国盗りをはじめ、一代で相模・伊豆二カ国いずを切り従え、跡を継いだ嫡子・氏綱の代からは、古の鎌倉執権にあやかっいて北条氏を称し、ますます拡大を進めていった。

宗瑞、氏綱、氏康、氏政——そして現当主・氏直で五代目に至る小田原北条氏の勢力圏は、いまや相模と伊豆のみならず、武蔵むさし、下総しもうさ、上総かずさ、常陸ひたち、上野、そしてこの下野にまで及んでおり、今にも関東一円を呑み込まんほどであった。

関東の名門諸侯の多くは、この新興大名の勢いに抗しきれず、あるものは滅ぼされ、あるものは降った。新三郎の旧主・佐野氏などもその一つで、日に日に強まる北条の圧力に耐えかね、北条氏からの養子を当主として迎えることで、家の実権すら差し出した。このため、反北条派の家臣は、佐野家から相次いで出奔した。……もっとも、新三郎の場合は、姉が反北条派の家臣に嫁いでいたために、家中の風当たりがきつくなり、追い詰められ、やむなく故郷を去ったに過ぎなかったが。

その一方で、下野の宇都宮氏、常陸の佐竹氏、下総の結城氏といった一部の大名たちは、

——坂東武者の誇りにかけて、屈するわけにはいかぬ。

と、反北条を掲げて同盟を結び、長きにわたる抵抗を続けていた。

しかし、その戦いも、じきに終わろうとしている。上方で勃興した中央政権——豊臣家の力によって。秀吉は、今や西日本をことごとく手中に収めており、その軍事力を前にしては、さしもの北条家も降るほかない。……そのような見解を、正親は語ってみせた。

（まったく、どういう手練手管を使ったのやら）

傍で話を聞いているだけの新三郎には想像もつかないが、あらかじめ人に聞き尋ねた話では、この岡本正親という男は関東を離れたのち、巧みに秀吉の懐に入り込み、今では豊臣家の客将に収まっているのだという。信じがたい話だが、宇都宮家に派遣されてきた豊臣の使者にも確認したというから、間違いないとのことだった。

これまでは、正親は書状を通じて、上方の様子や情勢を惟久に伝えるなどしてきたが、いよいよ関東の平定が近いということで、下野方面の情勢探索も兼ねて、喜連川に戻ってきたのだ。

「年内には、北条家の当主か、その父が上洛し、臣従を誓う予定にございます。そののちは、関白殿下御自ら東国にて裁定を行い、降る者には所領を安堵し、齒向かう者は取り潰して、見せしめとすることでしょう。関東に平穏が訪れるのは、そう遠い日ではありませんぬ」

「しかし、油断をしているわけには参らぬな」

腕を組み、惟久はうなった。

「確かに、近ごろの北条は、豊臣への臣従がため、宇都宮をはじめ関東諸侯との戦を、控えているようではある。が、北の山犬どもまでもが、素直に尾を振り、<sup>こうべ</sup>頭を垂れるかどうか」

彼がそう指摘するように、敵は北条だけではない。特に、近年、急速に勢力を拡大している奥州の伊達政宗<sup>だてまさむね</sup>は、かねてより宇都宮とは敵対関係にある。また、伊達と宇都宮の版図の境を領する、那須氏の動向も怪しい、と惟久は見ているようだった。

那須氏は、かつては宇都宮、佐竹ら反北条連合の一員であったが、近年は北条寄りの姿勢を見せており、宇都宮方と小競り合いが絶えなかった。

「当主の資晴<sup>すけはる</sup>は、『我が那須も、関白殿下に臣従する意向である』『もはや、宇都宮と争うつもりはない』などと申し伝えてきておるが、怪しいものよ。まして、伊達の圧力がさらに強まれば、いつ寝返ってもおかしくない」

いや、存外、すでに寝返っていないとも限らぬ。……険しい顔つきで、惟久はそう語った。宇都宮領の北方の守りを任され、那須氏と領土を接する塩谷氏の一門としては、長年



の仮想敵であるこの勢力の動向は、ある意味では北条や豊臣以上に気になるところであろう。

「されど、殿の母君は、那須のご家老（大関氏）の子でございましょう？　それほど縁深くとも、那須家は信用なりませぬか」

「人が悪いぞ、正親」

惟久は小さく舌を打った。

「お主の前にいるのは、実の兄を殺して、総領の座を奪おうとした男の息子だ。……こう言えば満足か、性悪狐め」

いよいよとなれば、血の繋がりなどなんの保障にもならない。喜連川塩谷氏の歴史自体が、なによりもそれを証明していた。

あえて、主君にそのことを言わせるように仕向けた老臣は、別段、悪びれた様子も見せず、

「分かっておられるようで、安堵致しました。ところで……」

と言って、新三郎の方へ視線を向けた。

「なにか言いたいことがありそうですな、若侍殿、いや、新三郎殿と申されたか」

「あ、いや……」

新三郎は、惟久の顔色をうかがった。この主君は、いかにも面白くなさそうな表情をしていたが、かといって、止めるほどの理由も思いつかなかつたらしい。

「申してみよ」

と顎をしゃくって、発言を促した。

「その、大したことではないのですが……そもそも、当家は宇都宮に仕える塩谷の、分家に過ぎませぬ。上方の動向などそこまで気にせずとも、総領家の判断に、ただ従えばいいのでは……」

新三郎がそう言った直後、耳をふさぎたくなるほどの哄笑が、広間に響き渡った。正親が、腹を抱えて大笑いしていた。

「なにをお笑いになられる」

「いや、失敬。ずいぶんと、人の好いことだと思ひましてな」

目尻に浮かんだ涙を拭いつつ、正親は答える。そして、ささやくように声をひそめ、こう続けた。

「新三郎殿、よくお考えあれ。その総領殿が、決して誤ることがないと、どうして言えましょう」

思わず、息を呑んだ。

もし、塩谷氏総領の義綱が判断を誤れば、喜連川も共倒れになる。それを避けるため、万が一に備え、独自に豊臣の動向を探り、正親を通じて繋がりを作っておく必要がある。……この老臣は、暗にそう言っているのだった。

（敵だけでなく、味方まで疑うなど！）

そう声を上げそうになったが、思い返してみれば、義綱と惟久の関係は、元より信頼などからはほど遠い。また、西国でも、秀吉に歯向かったために、あるいは逡巡の末に動きかねて機を逃したがために、取り潰された領主がいくらでもいることは、関東でも聞こえてくる。

「いや、いっそのこと」正親は含むように微笑し、「総領殿には、判断を誤って潰れて欲しいというのが、殿の御心の内やもしれませぬが……」

「な、なにを申すか！」

動揺を誤魔化すように、惟久は怒鳴った。

「わしは、あくまで塩谷の家名を残すことを思い、あらゆる事態に備えておるだけじゃ。心得違いを致すでないわ」

傍から聞いていても、あまりに白々しい物言いではあったが、正親はそれ以上追及することはなく、澄ました顔で続ける。

「左様でございますか。しかしながら、それがしは、己の望みを取り繕うたりは致しませぬ」

「望み？」

「ええ。とって、老いさき短き身にあつては、今さら、所領や金品など欲しませぬ。ただ、この讃岐守が、豊臣と喜連川を繋げ、存続を成し遂げた暁には、家中の者はだれ一人、それがしに頭が上がりなくなる。……そうして、かつてそれがしを追い出した者たちを、思う存分、這いつくばらせて詫びさせたい。それだけが、今の望みにございます」

口の端を大きく吊り上げ、老臣は老い皺しわぼんだ顔いっぱい、不気味な笑みを浮かべてみせた。誰もが言葉を失い、静まり返る広間の中で、くっくと低く漏れる正親の忍び笑いが、妙に大きく響いた。

しかし、順調かに思われた東国平定計画は、この数カ月後、突如として破綻することになる。

同年十月下旬、関東を激震させる、ある事件が起こった。

北条方の軍勢が、すでに豊臣に臣従していた真田氏の拠点・上州名胡桃城<sup>なぐるみじょう</sup>を占拠したのである（名胡桃城事件）。主家の意向を超えて、境界付近で紛争が起きてしまうことは、この時代としては珍しいことではない。だが、上州における真田と北条の領土境界は、豊臣政権直々の裁定によって決せられたものであり、この侵犯は秀吉の意向を無視する、重大な反逆であると見なされた。

このとき、北条家当主の氏直か、その父・氏政が、すぐさま上洛して弁明し、二心がないことを示していれば、あるいは赦免<sup>しゃめん</sup>の道もあったかもしれない。しかし、北条側は「激怒する秀吉のもとへ不用意に出向けば、拘束され、処断<sup>しゅんじゅん</sup>されかねない」と危惧して逡巡し、ますます豊臣側の心証を悪くした。結局、両家の関係はほどなくして決裂し、翌年——天正十八年（一五九〇年）三月、秀吉は二十万を超える大軍勢を率いて、北条領へと攻め寄せた。世にいう、小田原征伐である。

三月二十九日、北条方の最前線拠点・伊豆山中城を、わずか半日で陥落させた豊臣軍は、四月四日には北条方の本拠・小田原城まで攻め寄せ、包囲陣の構築を進めつつ、各地の拠点を次々と落としていていった。

「いったい、義綱めはなにをもたつておるのだ！」

戦況の報告を受けた惟久は、怒りのままに床を殴りつけた。すでに、四月も半ばを過ぎている。豊臣軍は今や、小田原城を蟻の這い出る隙間もないほどに取り囲み、本営として、石垣造りの堅固な陣城の築城を、着々と進めているという。

その間にも、伊豆下田、相模玉縄、上野松井田、箕輪、厩橋、武蔵江戸、河越といった、北条方の諸城陥落の報せが、この喜連川にも聞こえてくる。

もはや、大勢は決した。このままいけば遠からず、北条は攻め滅ぼされるだろう。宇都宮家としては、当主・国綱自ら軍勢を率い、一刻も早く秀吉の元へ参陣して、忠勤を示すべきであった。

ところが、国綱は動けずにいた。同行を命じた、有力一門の塩谷義綱が、あれこれと理由を構えて、居城の川崎城に籠り続けているからだだった。

——もしや、塩谷は敵方に内通し、謀叛を企てているのでは。

そのような疑念が、宇都宮家ではまことしやかに囁かれている。このため、国綱は決断がつかかね、未だ領国より腰を上げられずにいるらしい。

「あの阿呆は、塩谷はおろか、宇都宮をも滅ぼすつもりか！」

もはや、『総領殿』などと、建前の敬意を払う余裕もないらしい。惟久は怒気に満ちた形相で、吐き捨てるように言った。

しかし彼の言う通り、このまま豊臣方の参陣命令を無視し続ければ、宇都宮も塩谷も、共に取り潰されることは疑いようもなかった。

「されど、総領殿の不安も無理からぬこと」

煎茶をひとすすりして、正親が言った。他人事のように、落ち着き払った口ぶりだ。

「那須が、ひそかに伊達と結び、総領殿が留守にした隙をついて、塩谷領へ侵攻しようと企てている……などという風説もございますゆえ」

「だからあやつは腰抜けだというのよ。敵が攻めても来ないうちから、その影に怯えおって。……新三郎、酒を持て！」

「は……」

まだ日が高うございます、まして、いつ那須方と戦になるか分からないというのに……そんな言葉が頭をよぎったが、口には出さなかった。どうせ言ったところで、この主君は聞き入れないだろうし、なにより、惟久の手が小刻みに震えているのが、新三郎の目に映った。

（このお方も、追い詰められているのか）

苛立ちと焦燥を紛らわせる術が、酒しか思いつかなかったのだろう。その緊張は、新三郎にとっても他人事ではなかった。

運んできた瓶子<sup>へいし</sup>を傾け、惟久の手元の盃に酒を注いだ。その盃をひとすすりして、彼は大きく息をついた。

「とにかく、このままでは、義綱の阿呆のせいで、喜連川まで共倒れとなりかねぬ。なにか策はないか、正親」

「また関白殿下に、鷹や馬でも進上致しますか」

「いや、その程度ではもはや心もとない。もっと、確実な手立てはないのか」

そう言われて、正親は少し考え込む素振りを見せたが、やがて思いついたように、

「ああ、良い手がありますぞ。……お父上<sup>まぬが</sup>が仕損じたことを、息子のあなたが成し遂げればよろしい。さすれば、共倒れは免れます」

老臣は笑みさえ浮かべながら、世間話でもするかのように述べた。惟久も、傍らに控えていた新三郎も、一瞬、その意味を測りかねたが、

「ば、馬鹿な」

惟久がうめき声を上げたのと、新三郎が真意に気づいたのは、ほとんど同時だった。――義綱が動かぬせいで難渋しているのなら、惟久の手で討ち取り、総領家の家督を奪ってしまえ。この老臣は、そう言っているのだった。

「ああ、口封じの必要はございますまい。余所者の新三郎殿から話が漏れたとしても、家中の者たちは信じないでしょう。なにより、手駒は多い方がいい」

そう言われてから、自分の命が危機にあったことに、新三郎はようやく気付いた。たまたま他の小姓たちは交代の関係で外しており、今この一室には、惟久と正親、そして新三郎しかいなかった。

思考を先回りされ、拳を振り上げようとする前に、下げどころを抑えられてしまった惟久は、しばし呆然としていたが、やがて、

「馬鹿げている」

と呟いて、再び酒をすすった。その横顔は青ざめており、口元は微かにわなないている。

「いま、わしが義綱を攻めてみろ。それこそ、謀叛人ではないか」

「そうですね。そこが困ったところですが……では、こうしましょう。総領殿に、先に謀叛人になって頂くのです。さすれば、これを討った殿は、宇都宮に、ひいては豊臣に弓引く狼藉者を、先んじて成敗した忠臣にほかなりませぬ」

「濡れ衣を、でっちあげろと言うのか？」

「さて、まんざら、濡れ衣と言えるかどうか」

口元を扇で覆い、正親はくすくすと忍び笑いを漏らす。

「戦端が開かれて間もない時期、巷では、いかに豊臣が大軍とはいえ、あの北条が相手では、少なからず攻めあぐねるのではないか、などという見立てもござった。恐らく、総領殿はその頃に、伊達方から寝返りの働きかけを受けているはずです。……殿と同じように、ね」

「なっ……」

狼狽のあまり、惟久は盃を取り落とした。濡れた袴を拭うことも忘れ、魚のように口をぱくつかせている。

「い、いや、わしは……」

「ええ、わかっております。まだ戦の見通しも立たぬ時期に、そのような誘いに乗ったはずがない。されど、万が一、状況がどう転んでもよいように、はっきりと関わりを絶つほどの、強い拒絶もしていないはず」

そこが付け目ですよ、と正親はささやいた。義綱の居城——川崎城の文倉<sup>ふみくら</sup>には、伊達方とやり取りをした書状が、まだいくつも残されているはず。それさえ押さえてしまえば、言い逃れは効かなくなる、と。

「な、なりませぬ！」

たまらず、新三郎は声を上げた。このまま傍観していれば、惟久はこの化け狐のような老臣にそそのかされ、本気で総領家を襲いかねない。

「今は、塩谷一門……いや、宇都宮家中が一丸となり、結束して事に臨むべきときのはず！だというのに、味方である総領殿を陥れるなど、このような非道、間違っております！」

「非道？」

老臣は鼻で笑うと、目を細めて新三郎を見た。

「なら、なにもせず、ただ手をこまねいている方が良いと？　それで全てが滅んだとしても、同じことが言えますかな」

「まだ滅ぶと決まったわけではありません！」掴みかかるような勢いで、新三郎は身を乗り出した。「なぜ、総領殿を信じ、説得を続けようとなさらないのです！　家を残し、領地を守りたいという思いは、総領家も喜連川も変わらぬはず！」

自分が追われた、佐野家もこうだった。新三郎の脳裏には、かつての旧主家の光景が浮かんでいた。親北条と反北条、方針を巡って家中は真っ二つに割れ、両派は互いに疑い合い、憎み合い、家としての体を為さぬほどバラバラになっていった。そんな佐野家に、もはや一丸となった抵抗など望むべくもなく、家祖・藤原秀郷以来、東国に武威を誇って来た佐野の家督を、西国からの侵略者に過ぎない、北条の養子などに明け渡す羽目になってしまった。

もし結束していれば、まだ戦えたかもしれないのに。あるいは降るにしても、せめて家督を守るだけの抵抗は出来たかもしれないのに。

あんなことを、繰り返してはならない。新三郎は強く思った。だが、正親は、こちらの必死の訴えにも眉一つ動かさず、冷ややかな眼差しを返すばかりだった。

「……貴殿はまだ若い。いずれ知ることになるでしょう。なにかを守るためには、なにかを失わねばならぬということを」

そう言って、彼は惟久の方に向き直り、

「殿、一つお願いしたき儀がございます」

「なんじゃ」

「策を為す前に、根回しが必要です。豊臣方の官吏らが、こちらの言い分をすんなり聞き入れてくれるよう、あらかじめ、鼻薬を利かせておく必要がございます。……つきましては、この喜連川郷から、領地をいくらか、豊臣家に差し出すことをお許し頂きたい」

「なっ……いや、しかしそれは」

惟久はさすがに躊躇<sup>ちゅうちょ</sup>したが、正親は畳みかけるようにして続けた。

「あなたが総領となった暁には、塩谷領一帯が自らのものになるのです。ほんの少しの領地でそれが買えるのなら、安いものではありませんか」

しかし、豊臣側との交渉にあたって、いちいち惟久の許可を待っていれば、時がかかり、機を逸するかもしれない。……そのようなことを、正親はとうとうと説く。新三郎は慌て

て、このような言葉に乗せられてはならない、義綱を討つ以外にも道はあるはずだと、主君を止めるべく、必死に言葉を尽くした。

だが、惟久はもはや耳を貸さなかった。彼はただ一言、

「喜連川十五郷の差配、正親に一任する」

とだけ告げると、あとはなにも言わず、ただ、決断の重大さから目を逸らすかのよう  
に、無言で酒をあおるばかりだった。

(化け狐め……)

腹の底でそう吐き捨て、新三郎は正親を睨みつけたが、この謀略を企てた張本人は少しも悪びれた様子を見せず、道に迷った旅人を助けてやったかのような顔つきで、満足げに煎茶をすすっていた。

二日後、正親は計略を進めるべく、秀吉が本陣を置く小田原へと発った。その際、新三郎も同行を命じられた。豊臣方への工作が済み次第、惟久にそのことを伝える、連絡役としての任だ。無論、断ることなど、出来るはずはなかった。

## 三

喜連川を発って五日、ようやく小田原に至った新三郎は、包囲する豊臣軍の豪壮さに肝を潰した。十万、二十万と報せには聞いていたが、立ち並ぶ諸将の旗や陣幕は、地の果てまで続くかのようであり、軍勢はその周囲を雲霞の如く埋め尽くしている。こんなに大勢の人間を、この目に見るのは初めてだった。

それに、彼らの軍装の美々しさはどうだ。たまたま通りかかった陣所の警固番衆などは、一兵に至るまで金箔張りの頭形兜ずなりかぶとで揃えていた。宇都宮家の旗本衆ですら、この場に引き出されれば、足軽雑兵の集まりのように見えるだろう。まして喜連川衆など、百姓一揆も同然だ。

(これでは、北条も敵うはずがない)

その財力、軍事力の凄まじさに、新三郎はただただ圧倒されるばかりだった。

翌日、豊臣軍の本営である笠懸山城（石垣山城）で、新三郎は正親の従者という扱いで、秀吉への拝謁に同行する運びとなった。まずは秀吉の機嫌をうかがい、しかるのち、豊臣家の官吏への工作を進める運びであると、新三郎は聞かされていた。

普請場では、石材や木材、瓦などが目まぐるしく運びこまれ、工匠らの声や、木を削り、槌を打つ音が、絶えず辺りに響いている。その一角に陣幕を張り巡らせた本陣で、新三郎は正親に従い、初めて秀吉と対面した。

近臣たちがずらりと居並ぶ中、奥の床几に腰を据えていたのは、色の黒い、小柄な初老の男である。<sup>ひいとおどし</sup>緋糸絨の具足の上から、肩口を水色の鳥羽で飾り付けた、恐ろしく派手な金色の陣羽織を纏っている。

「久しいのう、正親」

男は歯を見せて、微笑みかけた。と、思った次の瞬間には、床几からさっと立ち上がり、近臣たちの制止も聞き入れず、正親のもとへ歩み寄って、その手を握りしめた。

「会いたかったぞよ。右も左もわからぬ関東で、お主のようにこの地に精通した男がいることが、どれほど頼もしいか。下野からはるばる、よう駆けつけてくれた、ほんに、よう来てくれたのう」

うっすら涙さえ浮かべながら、秀吉は正親の肩を叩き、繰り返し感謝の言葉を述べた。あの大軍を率いる天下人とは、とても思えない軽々しさに、新三郎は啞然とした。

「もったいのうございます、殿下」正親は畏<sup>かしこ</sup>まってその場にひれ伏した。「そのようなお言葉を頂戴するなど、それがし如きに恐れ多きこと。なにしろ、宇都宮家の参陣すら、未だ果たせぬ次第なれば……」

「さて、そこよな」

秀吉の顔から、笑みが消えた。

「困ったなあ、正親よ。そちの主家筋の総領の、塩谷伯耆守<sup>ほうきのかみ</sup>（義綱）と申したか。そやつが腰を上げぬせいで、国綱も動けぬという話ではないか」

口ぶりこそ変わらず親しげだったが、その目つきは氷のように冷え切っている。傍らに控えている新三郎ですら、背筋が寒くなるのを感じた。

「のう、正親、よもやとは思うが、そやつ、敵方に通じておるのではあるまいな」

声を低くし、秀吉は問い質す。すると、正親は顔を上げ、

「それはあり得ませぬ」

と断言した。そして、彼は懷から紙のようなものを取り出し、<sup>うやうや</sup>恭しく秀吉に差し出した。

「塩谷一門総領、伯耆守義綱殿は、すでに参陣を決し、かように誓紙をしたためられました。いまは、主君たる宇都宮国綱様と共に、急ぎ出陣の支度を進めておられます」

（なんだと！）

危うく、新三郎は声を上げそうになった。いつの間に、義綱に誓紙など書かせていたのだ。いや、そもそも、計画では、義綱を謀叛人として陥れるはずではなかったか。混乱



する新三郎をよそに、誓紙を受け取った秀吉は、しばし書面に目を落としたのち、ため息をついた。

「とろくさいのう、関東者は。うぬらの先祖は、頼朝公が一声かければ、たとえ一騎でも即座に鞍<sup>くら</sup>にまたがり、いざ鎌倉と馳せ参じたと聞くぞ。こんなものを書いている暇があれば、そうすべきではないか、のう？」

「申し開きの次第もございませぬ」

「が、誓紙すらよこさぬ那須に比べれば、塩谷はまだ可愛げがある。いま少しだけ猶<sup>ゆうよ</sup>予をやろう。しかし、長く待つとは思わぬことだと、帰って伯耆守に伝えよ」

「ははっ！ かたじけのうございまする！」

正親は深々と平伏した。新三郎もまた、それにならって頭を垂れた。そうして、二人はこの場から退出しようとしたが、

「ああ、待て、正親」

不意に、秀吉に呼び止められた。色黒の顔に、含むような笑みが浮んでいる。

「お主の所領を安堵してやろう」

「……恐れながら、所領の安堵は、宇都宮家の参陣が叶ってからというお約束では？」

「いや、お主はここまでよう骨を折ってくれた。予は働き者が好きじゃ。それにな、先にお主の所領を安堵してしまって、塩谷の総領にはこう伝えるのよ。早う来ないと、お主の所領を召し上げて、予の気に入りの岡本にくれてしまうぞ、とな。夜郎自大な田舎侍に、この脅しは効くぞ。ただ領地を奪われるばかりでなく、分家の家来の下風に立たされるなど、とても耐えられまいよ」

「これはなんとも、それがし如きには思いもよらぬところにて……」

「なに、このぐらい智恵のうちにも入らぬわ。して、正親よ、お主の父祖代々の所領はいかほどじゃ？」

ほんの一瞬、正親は躊躇<sup>ちゅうちょ</sup>する素振りを見せたが、すぐにこう答えた。

「……我が岡本家の領地は、野州塩谷郡、喜連川十五郷にございます」

天下人の前でなかったら、新三郎は叫び声をあげていただろう。それは、塩谷惟久の所領の全てであった。

## 四

同年七月五日、北条氏は秀吉に降伏し、小田原城を開城した。当主・氏直は高野山に追放、その父・氏政は切腹。かくして、戦国大名としての小田原北条氏は、ここに滅亡した。

戦後、秀吉は宇都宮城において、関東領主たちの処分を決定した（宇都宮仕置）。

宇都宮国綱は一門の塩谷義綱らと共に、五月には秀吉のもとへ参陣し、豊臣軍の指揮下で戦ったため、功績を認められて本領安堵。一方、再三の命令を無視して参陣しなかった那須資晴は、それまでの不審な姿勢も含めて咎められ、改易されてしまっている（ただし、那須旧臣らの運動の成果により、同年十月には、資晴の嫡男・藤王丸が知行五千石を与えられ、翌年には加増されて一万石となり、少身ながらも大名復帰を果たした）。

そして、喜連川城の塩谷惟久のもとへも、豊臣政権による裁定の結果が、岡本正親によってもたらされた。

家臣たちが居並ぶ広間で、正親は書状を読み上げる。が、惟久は、その内容を聞き終えるより早く、

「ふ、ふざけるなっ！」

激昂のままに、床にあった花入れを投げつけた。割れた陶器の破片が、正親の頬を薄く切りつけたが、この男はにじむ血を拭うでもなく、ただ薄ら笑いを浮かべた。

「なにを左様に騒がれるのです。殿は、それがしにお許し下さったではないですか。喜連川は、正親の差配に一任すると」

「黙れ！ 誰が主君の所領を、己が望むままに懐に入れろと申した！」

――喜連川十五郷は、岡本讃岐守正親に差し与える。

秀吉は、正親に対し、そのような朱印状を下賜した。実際には、岡本家代々の所領は、塩谷郡のうち泉一郷に過ぎなかったが、この天下人の裁定の前では、そんなことは関係がなかった。

これにより、塩谷惟久は代々の領地に対する所有権を喪失し、家臣である正親に一切を奪われてしまったのだ。

「わしは、那須とは違う！ なんの罪も落ち度もないわしが、なぜかような目に遭わねばならぬ！」

「ほう、なんの罪も？」わざとらしく、正親は目を丸くした。「それはおかしいですなあ。ご自身がなにをしようとしていたのか、もう忘れてしまったのですか？」

「う、うるさい！ わしは知らぬ！ 第一、わしは、なにもしておらぬではないか！」

「家臣に、謀叛のための工作を命じておいて、それはいささか虫が良すぎませぬか。それに、殿が伊達方から内応を仕掛けられた際の一連の書状は、すでにこちらで押さえております。これが豊臣方に伝われば、喜連川を退去するどころか、命まで失いかねないでしょうなあ。……しかしながら、仮にも我が旧主、路傍に放り出すのは哀れゆえ、特に情けをもって、我が喜連川領から、<sup>わしじゆく</sup>鷲宿一千石を割いてお譲りいたし申そう。さあ、早うそちらへ移られるがよろしい」

「お、おのれ！ おい、誰ぞ、正親を斬れ！ この痴れ者を斬り捨てよ！」

惟久は唾を飛ばして呼びかけたが、家臣たちは戸惑い、ざわつくばかりで、誰も立ち上がろうとはしない。無理もないことであつた。いまや、豊臣政権の裁定という大義を背負っている正親に逆らうなど、秀吉に刃を向けるも同然である。もつとも、惟久が普段から、家臣を慈しんでいれば、あるいは命を捨ててでも、その恩義に報いようとする者もいたかもしれないが。

せせら笑う正親を、惟久は齒噛みし、睨みつけることしか出来なかった。やがて、かつてこの城の主だった男は、口惜し気に背を向け、足音荒く広間を出て行った。

その後、喜連川の家臣たちも、一人、また一人と座を立った。豊臣の権威を恐れ、誰もが口には出さなかったが、彼らの顔にはありありと、私欲のために主家を陥れた正親への、軽蔑や憎悪が刻まれていた。

——（惟久は）<sup>つい</sup>終に岡本に鹽（塩）谷郡をうばわれける（『那須記』）

「おや、まだ居たのですか」

家臣たちがみな去った広間に、一人残る新三郎に、正親は声をかけた。

「すでに、佐野家から北条の者は追い払われたそうではないですか。ならば、早う故郷に戻り、かつての主家に帰参なさったらいかがです？」

しかし、新三郎は、その問いには答えず、逆に尋ね返す。

「復讐だったのか？」

「どういう意味ですか」

「お主はかつて、家中の反発により、喜連川城を追われたと聞いている。そのとき、<sup>かば</sup>庇おうとしなかった主君への意趣返しで、こんなことを……」

「ほほう、面白き見立てにござるな」

正親は愉快そうに笑ったが、

「されど、それは外れにござる。なんとなれば、それがしの追放騒ぎは、初めから、惟久殿と示し合わせた芝居ゆえ」

「なんだと？」

「豊臣との繋がりを作るために、しばらく国許を離れる名目が欲しかったのですよ。下手に表立って動いて、喜連川がなにやら総領家を出し抜こうとしているのではないかと、義綱殿に疑われても面倒ですからな」

「……では、やはり欲のためか？」

正親は、ずっと以前から、喜連川領を狙っていたのではないか。いや、あるいは、上方で豊臣と関わるうちに、領地を奪う算段を思いついたのか。……そのような推測を、新三郎は問いかけたが、正親はゆっくりとかぶりを振った。

「それがしは、どちらでも良かったのですよ。謀叛を持ちかけたときに、惟久殿がはっきりと断って下されば、そこで話は終わりだったのです」

「なんのことだ？」

「わかりませぬか。それがしは、義綱殿にも、同じ策を持ちかけたのです。そうして、乗るかどうかが試させて頂いたのですよ。……己が野心や、相手への疑念のために、軽はずみな行動を起こすようであれば、そんな領主は害でしかない。遠からず、なんらかの形でこの塩谷郡に、災いを持ち込んだに相違ありませぬ。ゆえに、少々、<sup>はかりごと</sup>謀を施させて頂いた次第」

惟久は、その誘惑に乗ってしまった。

だが、そのあとに正親が、義綱をひそかに尋ね、策を説いたところ、この総領家当主は明確に拒絶した。

——確かに、喜連川を攻め滅ぼしてしまえば、わしにとって都合がいい。また、惟久が憎くないといえば嘘になる。しかし、一門の総領たる者が、この期に及んで左様な粛清を主導すれば、いかな大義名分を掲げたとして、塩谷の者は、次は己の番ではないかと疑念を抱くことであろう。

——それは結局、敵方にわざわざ調略の隙を与えるようなものじゃ。この緊迫した情勢下にあつては、悪手でしかあるまいよ。

義綱はそのように述べ、豊臣方・宇都宮方との旗色を変えぬ証として、誓紙をしたためて正親に託したのだという。

「義綱殿と惟久殿に、そこまで器量の差があるとも思えませんが、ただ、さすがに三十過ぎまで総領の責任を負っていれば、相応の分別はつくようですな。立場が人を育てるというのも、まんざら嘘ではないらしい」

「馬鹿げている」

新三郎は小さく舌を打った。

「では、総領家と喜連川、両方とも策に乗って来たときは、どうするつもりだったというのだ？」

「簡単なことですよ」

正親は肩をすくめ、

「そのときは、両家ともさっさと取り潰してもらおうよう、宇都宮なり豊臣なりに進言するだけです。無論、そのあとに新しく家名を再興できるように、塩谷一族の者を一人、あらかじめ抱え込んではおきますがね」

まるで床飾りの掛け軸でも選ぶかのように、平然とした口ぶりで、正親はそう語った。

にわかに、信じられるような話ではない。しかし、どうしたわけか、ただの出まかせや絵空事として切り捨てることも躊躇<sup>ためら</sup>われた。嘘をつくのなら、この男はもっと上手くやる。そんな風に思えてならなかった。

「ああ、そうだ、新三郎殿」

不意に、正親は思い出したように、

「もし、まだしばらく、佐野家に戻らないというなら、一つ、使いを頼まれてくれませぬか」

「使い？」

「ええ。書状を一通、届けて頂きたいのです」

そう言って、懷から一枚の文書を取り出し、手渡して来た。その文面に目を走らせるうちに、新三郎は、己の顔から血の気が引いていくのがわかった。

正親めは老齢なれば、もはや戦働きは務まり難うございます。

しかしながら、喜連川城は関東より奥州へ至る街道の要所なれば、守りが拙<sup>つたな</sup>くては、東国統治にあたって支障がございましょう。つきましては、先だつて申し伝えたように、私はこの城を、関白殿下にお返ししたく存じます。そののちは、豊臣家の裁量によって、天下のために良き城主を選び、新たに任じて頂くよう、なにとぞお願い申し上げます。

豊臣家の奉行・増田長盛宛<sup>ましたながもり</sup>てに、そのような内容が書き連ねられていたのだ。

「なぜ、こんな……」

「それがしが城主をしていたら、血迷った惟久殿が奪還を企て、面倒なことにならないとも限らないでしょう？」

たしかに、城主が豊臣から送り込まれた者であれば、さすがに惟久も弓は引かないだろうが、だとしても解せない。それでは正親は、なんの見返りも得ることなく、悪名と恨みばかりを増やした末に、ただ塩谷の家名と平穩を守ったとでもいうのか。

「わからなくなった」

果然と呟き、新三郎はまじまじと正親を見た。

「お主が忠臣なのか、それとも奸臣なのか」

「どちらでもありませんよ。……それがしは、ただの化け狐ですからな」

そう言って、正親は踵<sup>きびす</sup>を返した。胴服の背にあしらわれた白い老狐が、にやりと笑ったように見えた。

数日後、新三郎は佐野家に帰参するため、喜連川から去ることになった。懷には、例の書状を収めてある。城を発つとき、正親が見送りに付き添った。

丘陵上に築かれた城からは、辺りが一望できる。つづら折りの坂道を下りながら、新三郎はなんとなく、足を止めて景色を見た。

麓を流れる内川の水面が、朝の陽光を照り返している。その周囲に広がる水田では、敷き詰められた青稲が、波打つように風に揺れていた。城下町の、鮎売りや瓜売りの威勢のいい呼び声が、こちらにまで微かに聞こえてくる。思えば、こんなふうじつくりと、喜連川の風景を眺めるのは初めてだったかもしれない。

「よい眺めですな」

そう言って、正親は新三郎の隣に立った。城下を眺める彼の顔つきは、これまでとは違いひどく穏やかで、愛おしんでいるようにさえ見えた。

「去るのが惜しくなりましたかな？」

「……さあな」

未練を振り払うように、再び歩き出す。

(……狐死すれば正に丘首<sup>きつね</sup>す、か)

足を動かしながら、かつて耳にした、そんな言葉を思い出していた。狐は、死ぬまで故郷を忘れない。確かにそうなのかもしれない。正親が、どんな思いで此度<sup>こたび</sup>の策を仕掛けたのか、新三郎はようやくわかったような気がしていた。

大戦の中で、戦火に巻き込まれることなく守られた風景を、もう一度、焼き付けるように目に映した。油蟬の鳴き声が、遠く背後から聞こえていた。

その後、ほどなくして、小弓公方——室町幕府体制における関東支配の責任者である、鎌倉<sup>こが</sup>(古河)公方家の分流——足利頼淳<sup>よりあつ</sup>(頼純<sup>よりずみ</sup>)が、新たな喜連川城主に任じられた。

さらに、豊臣政権の計らいにより、本家にあたる古河公方家の(実質的な)女性当主・氏姫が、頼淳の嫡子・国朝に嫁ぎ、古河・小弓に分裂していた鎌倉公方家の血筋は、喜連川において一本化された。これは、未だ東国では権威のある鎌倉公方の名によって、奥州・関東を繋ぐ街道<sup>くさび</sup>に楔を打ち込み、統治を固めようとする、秀吉の戦略によるものだろう。

塩谷惟久は、しばらく鷲宿に留まっていたが、やがて塩谷郡を離れ、母方の血縁を頼って那須家に身を寄せ、さらにのち、常陸水戸へ流れたという。

岡本讃岐守正親は、喜連川城を引き渡したのち、豊臣家の直臣として、塩谷郡泉で三千三百余石を領した。彼は七十五歳まで長命し、その家系は豊臣滅亡後も、幕臣として残った。

了

#### 《主要参考文献》

- ・「那須記」（『栃木県史』史料編 中世5 所収）
- ・『下野国誌』
- ・『寛政重修諸家譜』
- ・「鹽谷系図」（『栃木県史』史料編 中世4 所収）※喜連川塩谷氏
- ・「下野国塩谷庄川崎郷塩谷系譜」（『矢板市史』所収）※川崎塩谷氏（秋田藩士塩谷氏）
  
- ・荒川善夫『戦国期北関東の地域権力』岩田書院、1997
- ・江田郁夫 編『中世宇都宮氏 一族の展開と信仰・文芸』戎光祥出版、2020
- ・大田原市那須与一伝承館 編『豊臣秀吉と那須氏 激動の天正18年』大田原市那須与一伝承館、2020
- ・さくら市市史編さん委員会 編『喜連川町史 第6巻 通史編1 原始・古代/中世/近世』さくら市、2008

# 伊達氏

芦野氏

伊王野氏

大田原氏 大関氏

福原氏

川崎塩谷氏

日光山

君島氏

喜連川塩谷氏

氏家芳賀氏

那須氏

千本氏

壬生氏

宇都宮氏

祖母井氏

今泉氏

益子氏

西方氏

多功氏

芳賀氏

佐野氏

皆川氏

笠間氏

足利長尾氏

小山氏

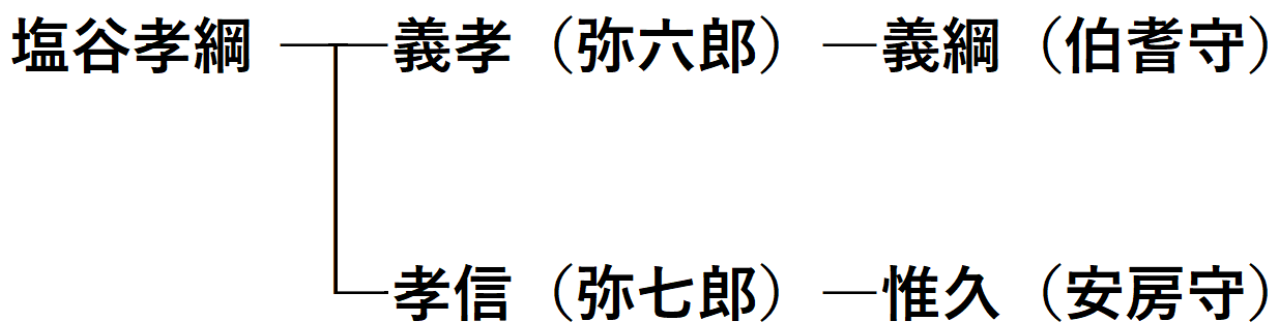
# 北条氏

「喜連川の謀将」  
勢力イメージ図



## 塩谷氏略系図

### 川崎塩谷氏（総領家）



### 喜連川塩谷氏

